

援助や外交団も大幅に増やされた。

また七二年には、対米依存の比重を減らして、日本や欧州など他の地域との関係を推進するという「第三の選択」政策が導入された。この政策とトルドー自身の魅力により、カナダは米国とはつきり一線を画して見られるようになり、またトロント大学のジョン・カートン教授によると、七〇年代半ばには「中級国家」だったカナダが今や主要国家と見なされるようになったという。

対米関係では、両国間のさまざまな懸案に対処するほか、カナダ経済に及ぼす米国の影響を減らす措置をとるなど、米国と協力しつつも国益優先の自主路線を歩んだ。外国投資審査庁の設立や国家エネルギー政策など、米国を怒らせた措置もあったが、国内および国際景気の変化により、これらはもはや摩擦の原因ではなくなった。

トルドーは開発途上諸国や第三世界にも大きな関心を寄せ、対外援助を大幅に増やしたほか、いわゆる南北問題の解決に努力した。

重視した対日関係

日加関係は、両国首脳の政治的決定に触発されて、一九七〇年代を通じて深まり、成熟した。特に一九七四年のトルドー・田中会談を契機として、文化、政治、科学技術などの分野で定期的な協議が行なわれるよう

になったほか、学术交流が盛んになり、また合同経済委員会および日加経済人会議が設立された。一九八〇年には、トルドー・大平会談で、外務大臣同士の定期協議が合意されている。両国には、それぞれ、日加関係の緊密化を推進しようという超党派の国会議員のグループもある。トルドー首相は、個人的にも大の日本びいきで、これまで何度も来日している。

かつては柔道の手ほどきを受け（息子さんたちも柔道を習っている）、京都では禅を組んだこともある。日本料理が好きで来日するたびにすしや天ぷらに舌つづみを打っている。昨年は、公務のあいまい息子さんと箱根へでかけ、和風旅館でくつろいだ一夜を過ごした。また一九七六年には、慶応大学から名誉法学博士号を授けられている。



ヨーロッパとの関係では、欧州共同体と経済協力大綱を締結して「契約的連結」をなし、またアフリカ、ラテンアメリカ、環太平洋の国々との関係強化に腐心した。トルドー首相が二、三数か月、最も力を入れたのが、東西間の緊張緩和を求め一連の平和外交である。トルドー首相は米ソをはじめ、中曽根総理を含む主要諸国の首脳と会談して、核戦争の恐怖と東西対話の再開を強く訴えた。核戦争の回避の中で続けられるトルドー氏の平和への努力は、今後いろいろな形で実を結ぶものと期待される。

首相在任十五年

というトルドー時代は、まもなく終わる。その正しい評価は後世にゆだねるほかないが、トルドーがその間カナダにとってきわめて大きな存在であったことは間違いない。



日本記者クラブで会見するトルドー首相（一九七六年）。

新首相が選ばれるまで

トルドー首相の辞意表明にともない、誰が次期首相になるかが焦点になってきた。

カナダでは、過半数の議席を有する政党が政権を担当することになっているが、自由党はすでに下院二百八十二議席のうち百四十六席を制しており、新しい党首が選ばれば、自動的に首相に就任することになる。

自由党は、六月十四日から十七日まで、オタワで党大会を開くことになっており、新党首はその場で各選挙区代表、連邦および州議員、党役員からなる代議員によって選ばれる。新党首はただちに党首の座につき、首相に就任するのは現職が正式に辞任してから。

新党首（首相）は、憲法上、必ずしも現職議員でなくてもいい。新首相は、かつてマッケンジー・キング首相が二度もやったように、議場に代理をたて、本人は議席をもたないまま傍聴席から指揮をとることもできる。もちろん内閣を組織し、総選挙を実施することも可能。しかし、できるだけ早い機会に、補欠選挙（通常、当選が確実視される選挙区で、同じ党の議員が自主的に辞任することによって行なわれる）を通じて議席を獲得するのが慣例である。

総選挙の時期は新首相が決定するが、ローマ法王の訪加が九月中旬に予定されていることもあって、秋以降になるものと思われる。